

【12月18日】黒澤歩さんが文学作品を翻訳出版

(2011/12/18 日曜日 12:41:27 JST) - 投稿者 webmaster - 最終更新日 (2011/12/18 日曜日 12:47:37 JST)

?? 結婚に伴う帰国後は主として執筆活動続ける黒澤歩さんが、30年ぶりに日本に紹介される21世紀東欧SF・ファンタスティカ傑作集《時間はだれも待ってくれない》を翻訳出版した(東京創元社刊・2625円)。今回は21世紀に入ってから書かれた10カ国12の優れた作品を、新進を含む各国語の専門家が精選翻訳したもので、黒澤さんはもちろんラトヴィアの作品を担当した。以下は黒澤さんから編集室に寄せられたメッセージ。(Latvija編集室)?? ラトヴィアの香りを訳したい?

黒澤 歩? 2011年9月末、翻訳したラトヴィアの小品が上梓されました。東京創元社の「21世紀東欧SF・ファンタスティカ傑作集、時間はだれも待ってくれない」の一片です。? 作品選びにあたって、ジャンルのほかに一定字数以内の短編であること、タイトルが示す通りに2001年以降に書かれていることという制限がありました。これらを念頭に、おおよその見当をつけて多数の作品を読んでいったわけですが、自分が好きな作風の作品が必ずしも条件に一致しないという難しさに、まず突き当たりました。私好みの同世代の女性作家や紳士的な年配男性作家の作品は長すぎたり現実的すぎました。それで、”いまの若い男が書くもの”に対する漠然とした抵抗感を捨てて、エインフェルズの最新作を選びました。ラトヴィア現代文学の幅を広げてもらったようなものです。? 次なる課題は、作中に登場する人名が併せもつ民族の属性を、翻訳でいかに現すかということでした。むかしから地域周辺の諸民族が共存してきた地域にあるラトヴィアで、通常、人の名前を聞けば、ラトヴィア人、リトアニア人、エストニア人、ドイツ人、ロシア人、スウェーデン人、ポーランド人、ユダヤ人、ウクライナ人、アルメニア人、ロマニ人等、民族的な属性はある程度は連想されます。とはいえ、人名の翻訳にいちいち民族の註をつけるのは憚られます。たとえば、ラトヴィアの作品にアレクサンドルスという名が登場すれば、それは大概においてロシア人もしくはロシア語系だと考えられます。文学作品において敢えてそういう名の人物が登場させるには、それなりの作家の意図があります。ラトヴィアの作品であっても、文中のアレクサンドルスの発する言葉は果たして何語だろうか考えると、中世を舞台にした作品の会話は、実際にはラトヴィア語はひとつも使われていなかったかもしれません。そんなことを考えつつも、今回の翻訳にあたっては、登場する多様な民族にこだわらずに話の流れを大切にしました。? ところで、いまのラトヴィアでは、総選挙で優勢となった親ロシア語系政党のイニシアチブによって、ロシア語を第二の公用語にするよう求める国民投票の実施が準備されようとしています。ベルジシユ大統領はこれについての姿勢を問われ、その結果まさか是とする結果が出た場合には、自分は辞職すると公言しています。「ラトヴィア語がなければ、ラトヴィアの国もない」と言うほど、ラトヴィア人にとってラトヴィア語のみを公用語とするかの是非は、今後の国のあり方を決める重要な試金石です。? さて翻訳に話を戻すと、地名が併せもつイメージの問題があります。ダウガワ河、リガ、コークネセ、スタブラグス……ラトヴィア人ならそう聞けばすぐに目に浮かぶ景色があり、連想される歴史があります。これらを前に私はお手上げ状態で、翻訳にはある程度の註をつけました。「花の名前は訳せても、花の香りは訳せない」とは、翻訳の可能性にしばし引用されるアルメニアの格言です。天災や戦災の報道をいくら写真や映像で見ても、匂いだけは現地に行ってみないとわかりません。ところが、この匂いこそが堪え難いものだという記事は多く読んだことがあります。然るに、文学作品の翻訳の最大の魅力は、訳しきれない匂いをいかに訳すかにあります。 いろんな条件と難しさを経て今回仕上がった作品は、ある意味で私の好きなラトヴィアのイメージにじっくりきました。初秋の夕暮れ、霧もやが立ちのぼる灰色のダウガワ河……そんな匂いの片鱗を漂わせたいのですが、さて、読者はどうとるか、そこが肝心です。(2011年12月14日記)?